一人ひとりの「できること」を地域の力に
～国際協力の経験を生かした多文化共生の実践～

認定NPO法人 アイキャン　事務局長　福田　浩之

アイキャンの原点

アイキャンの活動は、1993 年に 1 人の会社員が初めて訪れたフィリピンで、路上で生活する子どもたちと出会ったことをきっかけに始まりました。子どもたちの過酷な状況を前に、「何か自分（I）にもできる（CAN）ことがあるはず」と、翌年 1994 年に任意団体として設立しました。私たちは、「人々の“ために”ではなく、人々と“ともに”」をスローガンに掲げ、一人ひとりができることを持ち寄りながら、誰もが力を発揮できる社会をつくることを目指しています。

フィリピンの路上で生活する子どもと話す事務局長福田

国際協力の経験を国内の実践へ

私たちは、フィリピンで長年、地域開発に取り組んできました。そこでは、制度がない、または制度があっても十分に機能していない中で、地域住民がそれぞれの資源を持ち寄り、地域の課題を主体的に乗り越える力をどう育むかが、地域開発の実践のポイントでした。近年、日本でも地域課題は複雑化し、外国ルーツの人々も急増しています。しかし、既存の制度だけでは十分に対応しきれない現実があります。だからこそ、多文化共生を進めるうえでも、国際協力における地域開発の視点が重要になっていると感じています。そして、海外で培った開発的な視点を生かしながら、多文化共生に取り組むことに、国際協力 NGO ならではの意義があると考えています。

路上から仕事へ：協同組合を立ち上げ、カフェを運営する元路上生活の若者たち

「同志は誰か」から始まる実践

現在、私たちが国内で活動している岐阜県美濃加茂市や可児市は、外国籍住民の割合が約 10％にのぼり、その多くは日系フィリピン人や日系ブラジル人です。地域の人々と関わる中で、ブラジルルーツの住民の孤立や、夜に駅前でフィリピンルーツの若者が集まっている状況を知り、私たちも何かできないかと考えていました。私たちは、「地域の課題は何か」から始めるのではなく、「その課題に対して、何とかしたいと思っている同志は誰か」

外国ルーツの同志たちとの話し合い

という問いから実践を始めます。地域の現状にモヤモヤし、このままではいけないと感じている人たちとともに行動することで、地域の力が育まれていくと考えているからです。

そこで、市役所や派遣会社の通訳者、教会の牧師たちと意見交換の場を持ちました。現状への思いや価値観を共有し、それぞれの資源を持ち寄ることで生み出せる変化に言及しながら、関係を築いていきました。そうした関係の中から、ブラジルルーツの人々とは一般社団法人を立ち上げ、ブラジルルーツの住民向けの居場所づくりや相談事業を始めました。また、フィリピンの教会のリーダーの人々とともに、駅前で若者たちがお菓子や飲み物を囲みながら安心して過ごせる居場所「チルカフェ」の運営を始めました。地域に住む同志と関係を築き、その輪を広げながら、ともに地域をつくる担い手として組織化していく実践を進めています。

フィリピンコミュニティーと運営するチルカフェ

地域に広がる連携と参加の場

こうした実践は、行政や学校、地域団体との連携を通じて広がっています。例えば、行政、福祉事業所や学校と連携して、困難を抱える外国ルーツの子ども・若者や家庭への対応を進めています。家庭訪問や面談、相談対応を通して関係を築くだけでなく、その先に地域の中で活躍できる場や機会をつくることも大切にしています。

義務教育終了後は学校や行政との関係が途切れやすくなりますが、中学時代から私たちが関わりを築いていることで、卒業後もつながりを保ち、ボランティア参加など新たな役割へとつなげた事例もあります。

さらに、まちづくり協議会などと連携し、フィリピン文化を学ぶワークショップやクリスマス会を開くことで、地域住民が出会い、交流する場もつくってきました。

国籍にかかわらず、一緒に楽しんだクリスマス会

そうした場をきっかけに、外国ルーツの人が地域カフェに定期的に参加するようになったり、地域の料理教室に講師として招かれたりするなど、新たな関係や活動も生まれています。

若者の声を未来につなぐために

「僕は皆と同じで、将来は派遣会社だから」という外国ルーツの若者の言葉が、今も忘れられません。そのような働き方自体が悪いわけではありませんが、最初から自分の可能性を諦めてしまいやすい社会構造に対して、何とかしたいと思っています。そのため、今後は若者のキャリア支援に力を入れていく予定です。

私たちが必要だと感じているキャリア支援は、自分のルーツや強み、アイデンティティを日本社会の中で捉え直し、「なぜ自分はこうした状況にあるのか」と問い直すことです。そして、諦めや葛藤、モヤモヤをダンスや歌、写真や映像などを通して自分の外に出し、自分の言葉を取り戻していくことが必要だと感じています。

そうしたプロセスを経ることで、「私はこうありたい」という気持ちが、若者の内側から立ち上がってくると信じています。私たちは、そこから始めていきます。

チルカフェの中で、自分の好きな音楽を披露したフィリピンルーツの若者